被災者の体験を聞く
～三たび大槌を訪ねる④～

自分の体験を淡々と…

ボランティア二日目は「大槌町・花と夢いっぱいプロジェクト」、花壇の草取り作業だ。といっても、熱中症などに気をつけて午前中だけ。場所は道路に面したコンビニエンスストア横の花壇。国土交通省の小さな看板が立っており、その空き地を利用したものだ。

現地に着くと、一人の初老の男性がマリーゴールドの花壇の草取りをしていた。休憩時間に持参した麦茶を紙コップに入れて男性に届ける。

男性は近くの小槌仮設住宅の自治会長。「皆さんが遠くから来て草取りをして下さるのに、我々が知らん顔をしておくわけにはいかない。周りの人にも呼びかけたが、今回はお盆明けで忙しいらしく、私一人しか参加できず申し訳ない」と。

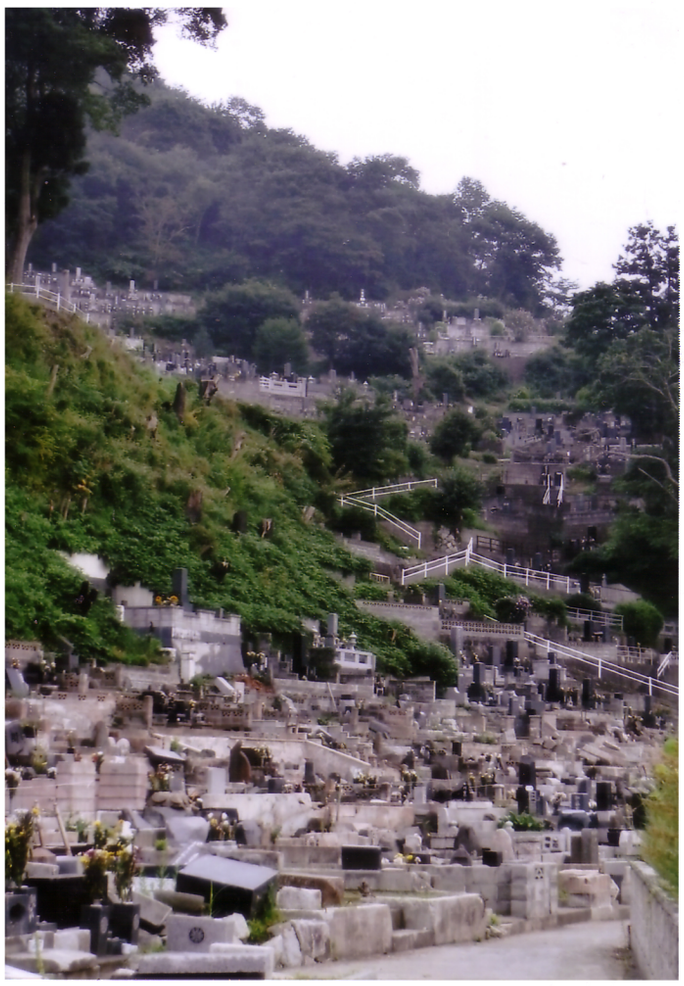
男性は壊滅的被害を受けた大槌町役場の近くに住んでいた。家は流失し、今も仮設住まいという。津波が来た時は、今は我々の宿舎になっている旧ビジネスホテル「寿」前の城山公園の下にある寺まで走って逃げた。

町役場と寺とのほぼ中間に石碑がある。これは昭和八年（一九三三）の三陸津波の際、津波が達したところに建てられたもの。寺は石碑から二百メートルばかり離れており、道路より一メートル以上高いところにあった。丘の上の公園まで逃げなくても、この寺まで逃げれば大丈夫だと思ったという。

寺跡のプレハブの連絡所

檀家が千二百戸、今は跡形もないが、かなり大きな寺だったらしい。震災の三月十一日はまだ外は寒く、寺まで逃げて来た人は建物の中に入り、住職がストーブを用意された。そこに大津波が押し寄せ、寺の中にいた五十人余と住職、住職の孫はここで亡くなった。

男性は寺の外にいたので押し寄せて来る大津波に気づき、上の城山公園へと階段を登り助かった。


公園への階段＝下から三分の一ぐらいが生死の境界だったとか

高齢者は階段を登るのに時間がかかり、お年寄りのズボンの腰の部分を握りしめ、引きずり上げるように上に向かった。階段の少し下の方の人は津波に飲み込まれて亡くなった。生きるも死ぬも紙一重、わずかな時間の差が生死を分けたという。

前日の夜は、初めてボランティアに参加した人のためにビデオで津波が大槌湾から町の中心部を飲み込む映像が流された。私はこれを見るのは三回目だが、城山公園の上から誰かが撮影したこのビデオは震災前の町の様子も交えられ、涙なくして見ることはできない。

大槌での朝の散歩は宿舎前の寺の周辺を何回も歩いているので、男性が麦茶を飲みながら淡々と話されることに胸が張り裂けそうな気持ちになる。

男性らが逃げてきた寺の跡地にはプレハブに「江岸寺連絡所」と書いた紙が張ってある。ここにあった寺の中で五十人を超える人が亡くなったことが受け入れられない。

助かった人が駆け登ったという斜面の階段がよく見える。

「生きるも死ぬも紙一重」。生き残った被災者が自分の生きる意味を問い続けることが多いといわれるのがわかる気がした。